

審査論文の要旨

毛沢東が「政権は銃口から生まれる」と言ったとおり、中国近代史における軍事の占める位置は、きわめて重大である。にもかかわらず、その歴史的な研究は、決して十分だとはいえない。本学位請求論文は、そうした学界の状況に鑑みて、19世紀後半の清朝を主たる分析対象とし、その首都・北京を防衛する軍事力の歴史的展開、およびそれを構成した諸要素・諸制度の分析を通じ、清末中国の国家体制のあり方とその変遷を描き出し、中国近代史研究の不可欠な前提を作り上げることを目的とするものである。全体四章および序論・結論からなるその要旨は、以下のとおり。

序

序論では、中国近代史とりわけ19世紀後半の清末時期の「軍事史」研究の現状と課題を明らかにし、その考察の意義を述べる。従前の着眼がナショナリズム的な視点による中央・地方の択一的な対立・相剋の側面に集中してきた学説史を概説し、あわせてその偏向を指摘し、そうした視点からする先行研究の限界を打破すべく、中央政府と首都近辺の軍隊との関係を考察することの意義を説き、清朝・北京政府の立場から定点観測を試み、半世紀を通じたその展開・変容を具体的な検討の基軸として、当該時期の「首都防衛」体制がもった歴史的な性格を論じることを研究の主眼とする、と述べる。

第一章「神機營の設立」

本章は、1860年代はじめ北京に設けられた洋式部隊・神機營の設立と役割をとりあげて、当時の「首都防衛」の構造を考察するものである。そもそも先行研究では、神機營をあつかった専論のほとんどない現状に鑑み、まず神機營の設立過程を跡づけ、その当初の構成と役割を位置づける。神機營は禁旅八旗の訓練を行うと同時に、朝廷内の権力に直結する武力でもあったと論じ、そのため朝廷内で西太后を支持する后党の一翼を担ってゆく展望を得た。そのうえで実際の神機營の運用を追跡し、北京・直隸防衛の任務が、督撫の義勇軍・私兵の性格の強い勇營などとの協働ですすめられ、その頂点に朝廷直属の神機營があつて、「首都防衛」体制全体を統轄監視する役割に特化してゆくことを明らかにしており、こうした構造の変遷を跡づけることが以下、本研究の根幹をなす。

第二章「直隸練軍の成立」

本章では、直隸省に配備されていた漢人正規軍の緑營を再編した練軍をとりあげ、前章で明らかにした神機營・勇營との関係をさぐる。とくに1860年代の捻軍・1870年の天津教案にさいし、北京朝廷は勇營の駐留を直隸省南部の前線に限定する一方で、神機營に北京を守備させた。そのなかで直隸練軍は朝廷と勇營とのいわば緩衝的な位置づけで、双方の中間地域に配置された。直隸練軍を編成し指揮するのは直隸総督だったから、北京朝廷

の対応をみることで、「首都防衛」および全体的な軍事に対するその利害関心をうかがうことが可能になる。そして以後、直隸練軍と勇營、そして神機營が選択的に併用され、重層的な防衛体制が構築されていった。こうした「首都防衛」の重層体制は、従前の兵・勇に対する「二者択一」的な視角ではとらえられなかったものである。

第三章「首都防衛における兵と勇——定武軍と盛軍を中心に」

本章は、直隸省の前線・沿海地域に駐在し、その防衛にあたった勇營・淮軍と北京朝廷との関係を取りあげたものである。直隸省にある淮軍の中核を担ったのは銘軍・武毅軍・盛軍の三部隊で、そのうち最大最強の盛軍が駐留守備したのが、「首都防衛」の要衝たる天津南方の小站・馬廠であった。ところが、この盛軍は紀律統制が十分でなく、朝廷の警戒の対象となり、その処遇が1880年代以降の一大懸案となった。1894年に日清戦争が勃発すると、直隸練軍の一部や盛軍をはじめとする淮軍が朝鮮に動員され、盛軍なき後の小站・馬廠には、新設の定武軍が駐留した。定武軍は北京附近で集められた義勇軍で、そこは盛軍と変わらない。けれどもその経費と指揮権は、中央の朝廷と督辦軍務処の下にあったから、20世紀の世紀交に「首都防衛」の要衝の担い手が、淮軍から北京政府に交代したわけで、それが以後の政治軍事に大きな意味をもつ。

第四章「「大軍雲集」下の首都防衛——日清戦争期における督辦軍務処を中心に」

本章は、1894年に起こった日清戦争を機に北京政府が設置した督辦軍務処を中心に分析をくわえて、「首都防衛」体制の変容をさぐるものである。日清戦争で朝鮮半島や遼東地域で敗退を重ねる状況に直面して、清朝政府で軍隊の指揮系統の統一を求める声が強くなり、設立に至ったのが督辦軍務処であった。当時の直隸省は各省督撫の指揮する勇營が集結して、治安が悪化をきたしており、そのなかで重層体制の「首都防衛」を機能させるべく、督辦軍務処は北京周辺に駐留する勇營を監視、監察する役割をになうことになる。そして日清戦争後、淮軍の大敗を受けて、新たな「首都防衛」体制の構築が俎上にのぼると、それを主導したのが督辦軍務処だった。直隸省の防衛は三種の勇營が併用され、定武軍のちの新建陸軍を指揮する督辦軍務処がその均衡の上に立って、首都の安定を保つ体制に転換したのである。

結

結論では、以上四章にわたる考察を総括して、清末に変遷した「首都防衛」体制を時系列にあとづけ、その性格を大きく三つの論点に帰納したうえで、学術的な展望を記す。第一に、アロー戦争による禁旅八旗の大敗と咸豊帝の蒙塵を発端としてはじまった「首都防衛」再構築の模索は、八旗・緑營という従来の正規軍を再編した部隊と、義勇兵・非正規軍であった勇營との重層的編成に帰結した。これらの多元的な軍隊が均衡を保つ中で、首都北京の安全保障がなされたのである。第二に、こうした経過にあつて、北京朝廷は勇營とそれを基盤とした直隸総督への警戒を解くことはなかった。勇營は自らに属さない軍隊

で、諸刃の剣だったからであり、そのため軍隊の直属化を志向するようになる。北京朝廷が日清戦争後に定武軍・新建陸軍の指揮権に固執したのも、そのあらわれであった。第三に、こうした「首都防衛」体制の動態・転換は、やがて北京政府の一元的な直接指揮に帰結する。新建陸軍にくわえ、それ以外の直隸省の主要な勇営を再編して、北京自らの指揮下に置いたのであり、日清戦争後に残存した淮軍も、その中に含まれていた。かくて誕生したのが武衛軍であり、これを指揮したのは、西太后の姻族にして軍機大臣管理兵部事務の榮祿である。同時にその指揮権の及ぶ範囲は、直隸省北部に限定されたものとなった。こうして、1860年以來の「首都防衛」体制の変遷は、北京政府の軍事権の局地化に帰結したのである。この趨勢は義和団戦争を経て、北洋六鎮にも引き継がれ、辛亥革命以後の情勢をもたらした一つの動因をなすものであった。